

① 次の1～8の——線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1 意識を集中させて矢をイ_ル。
- 2 アツカンの演技に感動した。
- 3 キンロウ感謝の日の意味を考える。
- 4 ゾウキ移植の手術が成功した。
- 5 知り合いにチヨメイな画家がいる。
- 6 書類作成のため判子をお持ちください。
- 7 この計画には極力参加したい。
- 8 異なる宗派のお寺に行ってみる。

② 次の1～4の漢字がA、Bそれぞれの意味として使われるように、下の漢字と組み合わせた二字熟語を作り、ウゝサの記号で書きなさい。ただし、同じ記号は一度しか使ってはけません。

例

方

A 向き (答 ア)
B やり方 (答 イ)

用例解説

「前方」

ア 前
イ 法

1 調

A ととのえる
B しらべる

2 質

A うまれつき
B といただす

3 密

A すきまがない
B ひそかに

4 温

A あたたかい
B じっくりとたいせつにする

ウ 資
エ 新
オ 存
カ 疑
キ 走
ク 保
ケ 査
コ 林
サ 秘

3 次の詩を読み、下の問いに答えなさい。

樹下の歌

いまさらとも
今道友信

A かなしい時には①樹を見よう

空にすつきり立つ幹の

孤独が白く日を映して

上にと澄むおもい

B かなしい時には②樹に聴こう

まひるの風ひかる高原に

月のぼる夜の潮騒も

知らない太古の琴を奏く

C かなしい時には③樹に行こう

幹にもたれて空見れば

幸も空しいちぎれ雲

D 蔭のみに④眸をそめて

④に心を乗せゆけば

千古変わらぬ空の声

『雲のゆくおるがん』

かまくら春秋社 による

(注) 眸 目のこと

1 線①「樹を見よう」とありますが、どのような樹の姿を「見る」のですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

A 白いうすぐもりの空を背景にして、ぼつんとさびしげに立っている樹の姿

イ 強い日の光を受けながら、孤独に負けない気持ちでいて勇ましく立つ樹の姿

ウ 明るい太陽のもと、たった一本でひたむきに高い空へのびてゆくとする樹の姿

エ 真つ青に澄んだ空を背景にすらっと枝をのばした、若くみずみずしい樹の姿

オ さんさんと日を浴びながら高い空にあこがれ、争い合つて枝をのばす樹の姿

2 線②「樹に聴こう」とありますが、何を「聴く」のですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

A 高原や海辺で太古の昔から命をつないできた小動物のたてる、心をなぐさめてくれる音

イ 風がふく草原の音や月夜の潮騒の音を思わせる、見知らぬ大昔から変わらない豊かな調べ

ウ さわやかな風がふさわたる高原や静かな月夜の海辺にひびく、古い琴のかなでる音色

エ 高原に住み潮騒を聞いたこともない人がかなでる、大昔に作られた琴のなめらかな音楽

オ 春風のそよぎや月夜の波音などの、今も自然界にあふれている、活気あふれる物音

3 線③「樹に行こう」とありますが、Cの連からはどのようなことが読みとれますか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

A ちぎれ雲をながめていると幸も不幸もちげけなものだと気づき、心がおだやかになったということ

イ 大きな樹の下にいればどんな災難からも守ってもらえるため、安らぎをおぼえたということ

ウ ちぎれ雲を見ていると自分の悲しみを思い出させられ、絶望的な気持ちになったということ

エ 引きちぎられたような心の痛みを感じているため、樹と仲良くはげまし合おうとしたということ

オ ちぎれ雲と樹だけが、自分の心を理解してくれる大切な存在であると気づいたということ

4 ④にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

A 葉

イ 月

ウ 鳥

エ 雲

オ 夢

5 この詩から読みとれることとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

A 豊かな自然の美しさを伝える樹とともにほらかな大空を見つめることで、この世界の複雑さと神秘を知り、生命への賛美の思いを持っている。

イ たくましい樹に守られて空を見上げながら、この広い世界の中に安心できる居場所があるのだから、一人でも生きていけると自分を慰めている。

ウ 自然に包まれ樹の生命力と接することによって、前向きで明るい気持ちになり、生きるための活力がわきあがっている。

エ 自然の中に生きている樹が、一人の人間の小さな喜びや悲しみを理解してくれたことに、深く感謝の気持ちを感じている。

オ はるかな歴史とともにある自然の豊かさを、堂々と立つ樹から感じることで、悲しみから解放され心が軽くなっている。

④ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ある日、亡くなった母が①一枚の写真を前に話してくれたことがあります。この写真は生家の居間の壁にずっとかけられていたので、今も鮮明に覚えています。その中の私は、まだ一歳になったばかりで、そばには姉といこたちが、晴れ着姿で、ご馳走の前に浮き浮きしたうれしそうな顔で座っています。

それは母方の祖母が、孫たちを、お雛祭りに招待してくれたときの写真でした。

私が生まれてまだ三か月というとき、大学の研究職にいた父は、ドイツのカイザーウィルヘルム研究所（現在のマックスプランク研究所）で研究することになり、単身、渡航しました。ドイツでの研究が終わった後、ヨーロッパからアメリカに渡って研究を続けたので、父が我が家に帰ってきたとき、私はすでに三歳を過ぎていました。父の留守中、母と私たちは母の実家のすぐそばに②留守宅を構えて暮らしていたので、孫たちの中でも私は祖父母との縁がとりわけ深かったと聞いています。

写真を前に、母は次のような話をしてくれました。

「この写真の中で、③あなたがただが普段着のまま座っているでしょう。この日はお雛様のお祭りに、おばあさまが孫たちをみんな呼んで、おもてなしをしてくださったの。あなたはまだ、一歳のお誕生日を迎えたばかりで、言葉も言えず、自分ひとりで食べることも、聞きわけよくおとなしくしていることもできなかったころのことだから、とても覚えてはいないでしょうけど。そのころのあなたは、言葉も分からないのに好奇心だけは④旺盛で、何にでも手を出して、食事中、机の上のご馳走をひっくり返したり、熱いものにさわって泣きだしたり、やれおしこだのと、騒がたることが日常だったので、その日はあなただけお手伝いさんと家で留守番をすることになっていたの。

おばあさまは、あなたがいつしよに来ていないのに気がつく、「なぜ、あの子は来ていないの？」と母親の私に言い、「とてもおとなしくしていないから、家で留守番を」と答えると、私を叱るように、「⑤お膳をひっくり返したり、ご馳走をめっちゃやにして、まわりに大騒ぎをさせるのも、親孝行のうちのひとつではないか」。さあ、すぐに連れておいで」と言って、一歳の孫が座る特別の場所をこしらえてくださったの。そこで大急ぎで留守番していたあなたをだっこして連れてきたので、あなたは、普段着のままなのよ」と、当時を懐かしむように説明してくれました。

まだ一歳のころといえば、晴れ着も、よそいきもないだろうから、私は母にそう言われるまで、写真を見てもとくに晴れ着を着ていない自分に気がつくこともありませんでした。たしかに正座することもできず足を投げだして、私は大きな座布団の上にちょこんと座っています。

私を家に置いてきた母の気持ちも分かります。私も自分の息子たちが幼いころは、じっとしていないので、夫婦のどちらかが子守り役で、夫が食事を終えたと、今度は交代で私が食べるしかなかったことを思い出します。子どもが眠ってから、やっと遅い食事をすることもしばしばでした。

ですから母は、幼い私がまわりに迷惑をかけて、せっかくの祖母の心づくしのお雛祭りを台無しにしてしまうのを氣遣ったのでしよう。とはいっても、家に残してきた子どものことも気がかりだったにちがいません。

祖母が言ってくれた「ご馳走をめっちゃにして、まわりに大騒ぎをさせるのも、親孝行のうちのひとつではないか」という言葉が、母の心にずっと残っていて、記念の写真というだけでなく、母にとっては特別の写真だったのかも——と思います。

それ以来、⑥母から聞いた祖母のその言葉を、母の声音とともに私はたびたび思い出すようになりました。息子たちがふざけてけがをしたり、客室のソファにマジックでいたずら書きをしたり、兄弟げんかをして窓ガラスを壊したりしたことも、余った反抗期のことも、それらは親孝行の一つと思うようになりました。

息子だけでなく、大人同士、仕事上で知人とうまくいかなかったり、迷惑をかけられたり、怒りが収まらなかった思い出もあります。けれども、今にして思えば、祖母の言うように、それらのことはすべて私の人生に対する〇〇孝行のような、生きていくうえでの栄養になって、私の人格の容量を広げてくれたのでした。祖母も母もまたそう思って、すべての人生の出来事をプラスに受け入れ、長く生きてきたのでしょうか。

⑦母との対話は日常茶飯事の会話の中に埋もれて多くを思い出せません。けれども私が小学生のころ、友だちとけんかをしたり、担任の先生への不満を母にぶつけると、おどけた調子で「今頃は相手の〇〇ちゃんもお母さんにこう言っているよ」とか「先生もためいきついで、こうおっしゃっているよ」と、お芝居の役者のように演じてくれるのでした。そして結局、二人とも笑って終わりにになりました。もし母がはじめに私をいさめていたら、私の不満はいつそう募ったことでしょうか。長じてそのときのことを思い出すと母が残してくれたものは、⑧相対化して物事を見る、ということだったのだと思います。

私が小学校の高学年になって、ひとりで祖母の家を訪ねることができるようになってからも、祖母はうるさそうな顔ひとつせず、子どものころ読んでいた⑨おとぎ草紙の話をしてくれたり、お手玉の作り方や、⑩草木染めで風呂敷をつくる方法を教えてくれたりしました。

そんなとき近郊の農家の女の人が野菜や卵の⑪行商に立ち寄ると、⑫薪炭が高くなったねえ、と祖母は物価高を嘆きながら、それでも縁側にお茶と漬物を出して行商の人を⑬A、その人が家族の愚痴を言うのを聞き役にまわって⑭Bのでした。

地方の小さな銀行の⑮頭取であり漢学者でもあった祖父のところには、たえず客が訪れて来ていました。祖母は⑯書生から年寄りまで、わけへだてなくもてなし、祖父が「そんなにもてなす必要はない」とぶつきらばうに言くと、「誠三郎さんのところに行くのと、くつろいでほつとすると言われたほうがいいでしょうが。私たちはもう⑰隠居でカネ配りはいらないけど、気配りだけはいつまでもできますよ」と珍しく反論して言うのが聞こえました。

どんなに貧乏しても、気配りだけはできる——それもまた、⑱私の心に残る祖母の対話語録の一つです。

注1 留守宅 〓 家の主人がいない時に住む仮住まい
注2 旺盛 〓 とてもさかんな様子
注3 相対化して 〓 いろいろな立場に立って
注4 おとぎ草紙 〓 子ども向けの、昔から伝わるお話
注5 草木染め 〓 天然の植物で染めること

注6 行商 〓 品物を持って売り歩くこと
注7 薪炭 〓 燃料であるたきぎと炭
注8 頭取 〓 銀行などで代表となる人
注9 書生 〓 学生
注10 隠居 〓 仕事を引退してのんびり暮らすこと

1 線①「一枚の写真」とありますが、これはどのような写真ですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。
ア 筆者の生家の居間の壁にずっとかけられていたもので、実家での楽しかった思い出を表す写真
イ 幼いころに父と過ごす時間が少なかった筆者の、あまえられないさびしい気持ちがまった写真
ウ 母が死んだ悲しさからかけたもので、写真の中の笑い顔が逆に悲しみを強調している写真
エ 筆者が小さかったころは好奇心が強く、おとなしくしていなかったことを楽しく思い出させる写真
オ 筆者がまだ幼くて手がかかるころの情景を写しとったもので、母にとっても印象深い写真

2 線②「あなただけが普段着のまま」とありますが、これはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。
ア おばあさまがお雛様のお祭りに筆者だけ招待するのを忘れてしまっていたから。
イ 筆者は日ごろからおとなしくせず、母に晴れ着を着させてもらえなかったから。
ウ いつもおとなしくしない筆者は晴れ着をすぐによごしてしまうと思われていたから。
エ 家で留守番をしていた筆者が、急にお雛様のお祭りに参加することになったから。
オ 筆者はまだ一歳のころなので、晴れ着もよそいきの服も持っていなかったから。

3 線③「なぜ、あの子は来ていないの？」とありますが、筆者の母はどのような理由で筆者を連れてこなかったのですか。その理由としてふさわしい「」から」につながる表現を——線③以降の文章中から四十五字以上五十字以内で探し、初めと終わりの三字をそれぞれ書きぬきなさい。

4 線④「お膳をひっくり返したり、ご馳走をめちやめちやにして、まわりに大騒ぎをさせるのも、親孝行のうちのひとつではないか——」とありますが、なぜこのように子どもの手がかかることが親孝行につながるのですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。
ア たとえ悪い出来事であっても、後で思い返すと逆に家族にとって良い思い出になっていることが多いから。
イ 親が感じる自分の子どもかわいらしさというのは、まさに子どもの手がかかるという点にあるから。
ウ 子どもが起こす悪い出来事でも前向きに考えていくことで、親が成長できるよききっかけになるから。
エ 親がしっかりと子どもの世話をするので、子どもが成長してから親に対してやさしく接してくれるから。
オ 親が子どもの世話をするので親子が強く結びつき、そこから家族のきずなが生まれると考えられるから。

5 線⑤「母から聞いた祖母のその言葉を、母の声音とともに私はたびたび思い出すようになりました」とありますが、この表現からどのようなことが読み取れますか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。
ア 時代をこえて祖母が直接筆者に話しかけてくれているかのように感じているということ
イ 祖母から母へ伝わった言葉が、今度は母の思いとともに筆者へ受けつがれたということ
ウ 祖母の声と母の声がとても似ているので、親子のつながりの深さを感じているということ
エ 筆者が自分の息子と接する時に、母の口調を参考にして接するようになったということ
オ 母の話し方を思い出すことで、筆者の不満やいかりの気持ちが落ち着いたということ

6 ⑥には体の一部を表す漢字一字が入ります。次の慣用的表現の中の□にその漢字があてはまらないものを一つ選び、記号で書きなさい。
ア □を切る イ □がかかる ウ □が出ない エ □に入れる オ □を引っ張る

7 線⑦「母との対話」とありますが、母は筆者にどのようなことを伝えようとしたのですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。
ア 何事も笑い飛ばすことができるような演技力を身につけてほしいということ
イ 笑いを共有しながら家族のきずなをだんだんと強めてほしいということ
ウ ユーモアを大切に、物事に対して多様な見方ができるようになってほしいということ
エ 相手の気持ちを考え、相手の願いどおりに行動できるようになってほしいということ
オ 他人を傷つけないために、最後はおたがいに楽しくなれる話をしてほしいということ

ア	A	いたわり	—	B	慰める なぐさめる
イ	A	ねぎらい	—	B	一緒に悲しむ いっしょ
ウ	A	心配し	—	B	元気づける
エ	A	もてなし	—	B	けなす
オ	A	さげすみ	—	B	ほほえむ

(下書き用)

	A	B
()		
()	対話をすることで	が大切だ。

[illegible]

現代の食を取り巻く環境は、矛盾に満ちている。日々の生活を送っているあいだに犯してしまう許しがたい罪の重さは、とりわけ食の王国で増していく。(注1) 節度と(注2) 克己心をふりかざす(注3) 偽善的な説教師のように、わたしたちは大好物のあれこれを敵視するが、そのくせ自分の食欲とは(注4) 折り合いがつけられずにもてあましていく。かつては特別な日のごちそうだった食べ物も多くが——肉料理からお菓子まで——日常的な食品となり、食べすぎの原因となるだけでなく、祝祭の象徴としての意味も褪せてしまった。次の食事の時間が来るまでは食べないという考えは、外出するときはかならず帽子をかぶるという習慣と同じように、もはや時代遅れのように感じられる。

わたしがつねに立ち返ったテーマは、
 ② だった。わたしたちの食べ物に関する知識の多くは、子供時代に、キッチン、食卓に座って食べさせてもらっているときに身につけたものだ（幸運だったのだと思う）。食べ物の味はすべて脳に記憶されるが、もつとも強い記憶として残るのは、初めての味である。家族とかこむ食卓で、わたしたちは食べ物と愛の両方を与えられる。そのふたつが（注6）渾然一体となつていくなかなか気づけなくても、長い年月を歩んだのちには許してもらえに違いない。まさにこの場所で、わたしたちは食べ物の好き嫌いを発達させ、また、皿の端に少し残すのと、おなかがいっぱいでも全部食べるのと、どちらが無駄につながるかの感覚をはぐくむ。

10

一説では、二歳のときの食習慣——食べ物で遊んだかどうか、偏食はどの程度だったか、どれくらい果物を食べたか——が、二〇歳のときの食べ方にきわめて決定的な影響をおよぼすという。

食習慣の獲得は、たとえば靴紐のむすび方や数の数え方、自転車の乗り方など、子供時代に覚えるほかの多くの事柄よりも、ずっとミステリアスだ。わたしたちは、^③自分がなにをしているのかほとんど意識しないまま、食習慣を身につける。また、それが妙なものであったとしても、あまりに自分と一体化しているために、やはり意識することはない。なんらかの嗜好ができあがってしまうと、それは自分と他者との決定的な違い、普通とは異なる癖とみなされる。家族のなかでもこの子だけレモンの苦い皮を噛むのが好きだとか、リンゴを芯まで食べる子とか、言われるようになるのである。

④

なかには、子供の味覚が不健康でも、成長して声変わりをしたり政治的な意識に目覚めたりする頃になれば自然にサラダも好きになる、それほど心配する必要はない、という意見もある。たしかに、それもひとつの真実だ。恋と旅は、どちらも^⑤大きな変化を起こすきっかけとなる。一九七〇年代の少年少女の場合、一九五〇年代に食べさせられた平凡で味気ない食べ物に背を向け、スパイシーな緑豆カレーを好むことが一種の通過儀礼だった。成長してから出会う味は多い。たとえば緑茶とか、それから、願わくは成人してからであってほしいが、^⑥ウオッカとか。苦いけれどもおいしい味がわかるようになるとき、心理学的には、苦痛であったものが喜びに変わる「快楽への移行」を経験していることになる。子供のときはいやでたまらなかった^⑦エスプレッソの苦味も、飲んだあとに身体がシャキッとして、やる気がわいてくるのがわかったら、いやでなくなるものだ。ではどうすれば健康的な食事をほどほどに食べることが、同じように「快楽」に移行するのか、知りたいではないか。

もちろん、その過程は人によって異なるに違いない。誰もが独自の食べ方を身につけてきたのだから。しかし、^⑧出発点は異なっても、味覚や食習慣は絶対的なものではなく、変えられるのだと認識することが、よりよい食べ方を学ぶ第一歩となる。

(ビー・ウィルソン 作／堤理華 訳「人はこうして「食べる」を学ぶ」原書房 による)

注1 節度 〓 度をこさず適度であること

注2 克己心 〓 自分のわがままや欲望にうち勝つ心

注3 偽善的な 〓 うわべは良い事をしているように見せかけている

注4 折り合い 〓 ゆずり合ってうまくまとめること

注5 遵守している 〓 しつかりと守っている

注6 渾然一体 〓 とけ合って区別がつかないさま

注7 嗜好 〓 ある物を特に好むこと

注8 通過儀礼 〓 誰もが必ず経験する事柄

注9 ウオッカ 〓 お酒の一種

注10 エスプレッソ 〓 濃厚なコーヒー

1 線①「矛盾に満ちている」とありますが、その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 自分の大好物のケーキは太る原因になるので、親から食べるのを禁止されている。

イ かつてはクリスマスなどにしか食べられなかった肉料理が日常的に食べられるようになった。

ウ 昔は正月などの特別な日にしか食べられなかったおもちが、今ではあまり食べられていない。

エ 親が子どもに間食はいけなと言いが、これはもう古い考え方とされている。

オ しつけとして子供に残さずに食べなさいと注意することが、子どもの肥満に直結している。

2 ②にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 健康 イ 現代 ウ 親 エ 家族 オ 子供

3 線③「自分がなにをしているのかほとんど意識しないまま、食習慣を身につける」とありますが、これはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 子供のときには、親のしつめたとおりの食べ方をすなおに守っていたから。

イ 子供のときには、自分の食べる物を自分では決められなかったから。

ウ 子供のころ、食事のときに自分の好きな食べ物しか食べなかったから。

エ 子供のときに、食べ物と愛の両方を親から与えられたから。

オ 食事のときにどうすれば親が喜ぶのか、教えられなくても学んできたから。

④には次のA～Cの文章が入ります。これらを正しく並べた組み合わせとしてふさわしいものを後のA～Cの中から一つ選び、記号で書きなさい。

A 問題は、特定の食物群全体を嫌いに育ってしまう場合であり、そうなるに必要な栄養素を食事からとれなくなってしまう。子供の肥満の最前線で診療している医師たちは、この数十年のあいだに、果物も野菜もいっさい食べない幼児が多くなってきたという。

B これは便秘の原因になる。あまり注目されていないが、西洋諸国では便秘は見通しにはできない問題となっており、アメリカでは年間二五〇万人が医療機関を受診している。

C 一方、嫌いな食べ物のはうは、あつてもさほど困らないだろうと思う人もいるだろう。誰にでもひとつかふたつはあるのだから。もちろん、あなたが毛モノのけだだった皮が嫌いだとしても、とがめはしない。半熟卵のどろりとした白身が苦手なわたしを許してくれるなら。

ア
A
↓
B
↓
C

$\nearrow$
 A
 $\downarrow$
 C
 $\downarrow$
 B

$$\begin{array}{c} \text{B} \\ \downarrow \\ \text{A} \\ \downarrow \\ \text{C} \end{array}$$
$$\begin{array}{c} \mathbb{I} \\ \downarrow \\ \mathbb{B} \\ \downarrow \\ \mathbb{C} \\ \downarrow \\ \mathbb{A} \end{array}$$
$$\begin{array}{c} \text{C} \\ \downarrow \\ \text{A} \\ \downarrow \\ \text{B} \end{array}$$
$$\begin{array}{c} \text{C} \\ \downarrow \\ \text{B} \\ \downarrow \\ \text{A} \end{array}$$

5 線⑤「大きな変化」とありますが、食べ物についてはどのように「変化」するのですか。三十五字以内で書きなさい。

(下書き用)

[illegible]

6 線⑥「その過程」とありますが、これはどのようなものですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

自分の大好きな食べ物だけをおなかいっぱい食べるようになる過程

イ 親から与えられた食べ物を、いやがらないで食べるようになる過程

栄養のバランスなどを考えた食事を適度に食べるようになる過程

強い香りや苦みのある食べ物ばかりを食べるようになる過程

才 他人の特別な好みを受け入れ、同じものを食べるようになる過程

7
線⑦「出発点」とありますが、これはどのようなものですか。その説明としてふさわしいものを次の中からすべて選び、記号で書きなさい。

ア 子供のときに親からしつけられた食習慣

イ 食卓に座って親から食べさせてもらった幸福感

家族とかこむ食卓にあふれた親からの愛情

工 最も強い記憶として残った初めての食べ物の味

才 予算の許す範囲で、自分の食べたいものを選ぶ自由

8 本文の内容と合っているものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 残さずに食べなさいと親が子供に注意するのは、日本独自の文化である。

今の自分の食べ物の味覚や食習慣が、よい食べ方かどうかを検討することは大切だ。

食べ物の選択について子供は無力なので、親たちはほんとうに大変だと文句を言う。

工 嫌いな食べ物、自分と他者との決定的なちがいなので、あつてもさほど困らない。

時代に應じた新しい食習慣を親は子どもに身につけさせなければならない。

(問題はこれで終わりです)

得	点